

原 著

ミルトンにおける死 (3) 第二部  
— *An Epitaph on the Marchioness of Winchester*  
と Jonson の *An Elegy* との比較 —

武 村 早 苗

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科

(平成9年5月21日受理)

Death in Milton (3) Part II  
— A Comparison of *An Epitaph on the Marchioness*  
*of Winchester* with Jonson's *An Elegy* —

**Sanae TAKEMURA**

*Department of Medical Social Work*  
*Faculty of Medical Welfare*  
*Kawasaki University of Medical Welfare*  
*Kurashiki, 701-01, Japan*  
(Accepted May 21, 1997)

**Key words:** Lady Jane, flower, Rachel, Milton, Jonson

**Abstract**

This second of a two-part study discusses Milton's view of Lady Jane and the images in his *An Epitaph on the Marchioness of Winchester*. Then his *Epitaph* and Jonson's *Elegy* on the same lady are compared for general tone, images, the idea of death and of praise.

**要 約**

今回は第二部として、ミルトンの *An Epitaph on the Marchioness of Winchester* を取り上げ、詩のイメージと Lady Jane に対する詩人の意識を考察する。しかるのち、ミルトンの *Epitaph* と、同じ貴婦人に捧げられた Jonson の *Elegy* とを比較検討する。特に詩の雰囲気、イメージ、死と賞讃についての見解が論じられる。

## はじめに

前回の小論において、筆者はウィンチェスター侯爵夫人、Jane Pauletに捧げられたJonsonの*Elegy*についての分析を試みた<sup>1)</sup>。本稿では、同じ貴婦人にあてて書かれたミルトンの追悼詩、*An Epitaph on the Marchioness of Winchester*<sup>2)</sup>(1631)を問題にし、22歳の青年が23歳の淑女の死をどのように描いているかを考察したい。*Epitaph*には植物のイメージが豊富に存在することに注目し、それらの植物が追悼詩に如何なる効果をあたえているかを見ることにする。

この詩は対照的な二つの部分に分けられる。はじめの46行においては、侯爵夫人のことが第三者によって言及される。後半では、夫人が直接に呼びかけられ、現在の彼女の幸福な状態が慰めをもたらす<sup>3)</sup>。

## 1

*An Epitaph on the Marchioness  
of Winchester*<sup>4)</sup>

This rich marble doth inter  
The honored wife of Winchester,  
A viscount's daughter, an earl's heir,  
Besides what her virtues fair  
Added to her noble birth, 5  
More than she could own from earth.  
Summers three times eight save one  
She had told; alas, too soon,  
After so short time of breath,  
To house with darkness and with death. 10

Yet had the number of her days  
Been as complete as was her praise,  
Nature and fate had had no strife  
In giving limit to her life.  
Her high birth and her graces sweet 15  
Quickly found a lover meet;  
The virgin quire for her request  
The god that sits at marriage feast;  
He at their invoking came  
But with a scarce well-lighted flame; 20

And in his garland as he stood,  
Ye might discern a cypress bud.  
Once had the early matrons run  
To greet her of a lovely son,  
And now with second hope she goes, 25  
And calls Lucina to her throes;  
But whether by mischance or blame,  
Atropos for Lucina came,  
And with remorseless cruelty  
Spoiled at once both fruit and tree: 30  
The hapless babe before his birth  
Had burial, yet not laid in earth,  
And the languished mother's womb  
Was not long a living tomb.  
So have I seen some tender slip, 35  
Saved with care from winter's nip,  
The pride of her carnation train,  
Plucked up by some unheedy swain,  
Who only thought to crop the flow'r  
New shot up from vernal show'r; 40  
But the fair blossom hangs the head  
Sideways as on a dying bed,  
And those pearls of dew she wears  
Prove to be presaging tears  
Which the sad morn had let fall 45  
On her hast'ning funeral.  
Gentle Lady, may thy grave  
Peace and quiet ever have;  
After this thy travail sore  
Sweet rest seize thee evermore, 50  
That to give the world increase  
Shortened hast thy own life's lease;  
Here, besides the sorrowing  
That thy noble house doth bring,  
Here be tears of perfect moan 55  
Wept for thee in Helicon,  
And some flowers and some bays  
For thy hearse to strew the ways,  
Sent thee from the banks of Came,  
Devoted to thy virtuous name; 60  
Whilst thou, bright saint, high sitt'st in  
glory,  
Next her much like to thee in story,

That fair Syrian shepherdess,  
 Who after years of barrenness  
 The highly favored Joseph bore 65  
 To him that served for her before,  
 And at her next birth much like thee,  
 Through pangs fled to felicity,  
 Far within the bosom bright  
 Of blazing Majesty and Light; 70  
 There with thee, new-welcome saint,  
 Like fortunes may her soul acquaint,  
 With thee there clad in radiant sheen,  
 No marchioness, but now a queen.  
 (1631)

### ウィンチェスター侯爵夫人の墓碑銘

この豪華な大理石は、誉れたかい  
 ウィンチェスター夫人を埋葬している。  
 彼女は子爵の令嬢、伯爵の世継ぎである。  
 そのうえ、貴い育ちに加えられた  
 淑やかな美德は 5  
 天から授かったものである。  
 八の三倍から一をひくと夫人の年齢だ。  
 あゝあまりにも早すぎる、  
 それほど短い生涯ののち  
 暗黒や死とともに住まうとは。 10  
 彼女が生きた日数が、彼女が受けた讃美と  
 同じくらい完全であったならば、  
 生命に限りをあたえることで  
 自然と運命が争うことはなかっただろうに。  
 夫人の貴い生まれと優しい魅力は 15  
 いち早くふさわしい恋人を見つけた。  
 花嫁のつきそいの乙女らは  
 婚姻の神を呼びよせる。  
 祈りに応えて神は来たが、  
 あまり明るくないたいまつを持ち 20  
 たずさえていた花環には  
 糸杉の蕾がひとつ認められた。  
 かつては助産婦らが、かわいい坊やの  
 お祝いを言いに駆けつけた。  
 そうして今、二番目の子供の誕生を望み、 25  
 夫人はルシーナを陣痛の床に呼んだ。  
 しかし、不運なのか過失なのか、  
 ルシーナの代りにアトロポスがやってきた。

そうして無慈悲な冷たさで  
 果実と樹を同時に台無しにしてしまった。 30  
 不幸な赤ん坊は生まれる前に  
 葬られたが、土の中ではなく、  
 おとろえた母の胎内も  
 長くは生きた墓とならなかった。  
 そのような若木を私は見たことがある。 35  
 冬の霜から注意深く守られて  
 カーネーション族の誇りであったが、  
 心なき若者にひっこぬかれてしまった。  
 春雨で、急に芽を出したその花を  
 彼はただ摘みとろうとしたのだが。 40  
 しかし、その美しい花は死の床に伏すように  
 はすかいにうなだれている。  
 花に宿る真珠の露は、  
 その早すぎる死に  
 悲しむ朝が注いだ 45  
 予言の涙であったろう。  
 優雅な令夫人よ、あなたの墓がつねに  
 平和と静けさを保ちますように。  
 お産の苦しみの後では、優しい休息が  
 永久にあなたのものとなりますように。 50  
 この世に子孫をふやすために  
 寿命をちぢめたあなたに  
 あなたの高貴な家族がもたらす  
 悲しみの他にも  
 へりこんで流された 55  
 心からの哀悼の涙がある。  
 あなたの棺が通る道にまくための  
 花々や月桂樹の枝葉もある。  
 それらはあなたの徳高き名に捧げるべく  
 キャン川の堤から送られたものだ。 60  
 輝く聖女よ、あなたは栄光の中にいと高く  
 坐っている。隣には、あなたの身の上と  
 よく似た、シリアの美しい羊飼がいる。  
 彼女は長い不妊のあと、  
 すばらしく祝福されたヨセフを生んだ。 65  
 彼女を得ようと働いた夫ヤコブのために。  
 そうしてあなたと同様、次のお産のとき、  
 難産を経て、至福の場所へと飛びさった。  
 はるか彼方の、燃えたつばかりの  
 荘厳と光の輝くふところへ。 70  
 そこではラケルの霊が、似かよった運命で、

新たに歓迎された聖女、あなたと親しく  
交わるであろう。天国の輝きに包まれたあなたと。

侯爵夫人ではなく、今は女王であるあなたと。

## 2 花と木のイメージ

### 1) 婚礼を司どる神

婚礼を司どる神は Hymen と呼ばれる男神で、彼は花ではないが、花に縁の深い神なので、ここに数えることにする。Jonson の *Hymenai* によれば、Hymen は「サフラン色のローブの下には白い服、靴下は黄色、黄色い絹のヴェールを左手に、松のたいまつを右手に持って、頭にはバラとマヨラナの冠をのせている。<sup>5)</sup>」バラは愛の象徴、マヨラナは薄紫または白い花で、「古代ギリシャ・ローマでは、祝言の花として新郎新婦が頭にのせた。<sup>6)</sup>」当時の貴族階級の風習として、Jane Paulet の結婚式にも婚礼の神とその従者に扮装した役者たちが列席していたと想像される。

### 2) 糸 杉

詩人によれば、この Hymenこそ、のちに災をもたらす前ぶれであった。『変身物語』にあるように、「彼が手にしているたいまつも、始終ぶすぶすとくすぶって、涙を出させるばかりで、いくら振っても燃えあがらなかった。<sup>7)</sup>」さらに、花環には糸杉 (cypress) の蕾が入っていた。糸杉は実を結ばないという伝説によって、古代ローマでは冥界の王 Pluto や Fates, Furies の木とされ、一般に死の象徴として、イチイとともに墓地に植えられる。また、喪の象徴として上流社会の葬儀に多く用いられた<sup>8)</sup>。糸杉の蕾 (cypress bud) は、死んで生まれた赤ん坊(二男)を暗示していると解釈できる。

### 3) カーネーション

出産によって母も子も亡くなったことを、詩人は次のように喩えている。冬(23年の生涯)を生きぬいた貴重な若木(Lady Jane)が、若者(死)によってひっこぬかれてしまった。若者(死)は新しく芽をふいたその花(赤ん坊)だけを摘もうとしたのだったが<sup>9)</sup>。

Lady Jane の一族はカーネーションに喩えられている。「中世期にはカーネーションはバラに

次いで人気があり、ことに女性が好み、城内の庭などに植えて楽しんだという…エリザベス朝では広く愛された花のひとつである。<sup>10)</sup>」侯爵家が古い家柄で城に居住し、Jane が城の女主人であることが、カーネーションが選ばれたひとつの理由になるであろう。

### 4) そ の 他

婚礼の神は garland (21) を冠り、子と母は fruit and tree (30)。Jane は tender slip (35) で表わされ、葬列に撒かれるのは some flowers and some bays (57) である。bays (月桂樹) は復活の象徴であるために、葬儀には欠かせぬ木であるという<sup>11)</sup>。

以上のように、花と木のイメージを観察して感じることは、この詩が悲歌であるにもかかわらず、華やかな彩りと香ぐわしさを備えていることである。そういう牧歌的な雰囲気の中にいるのが、‘a tender and beautiful doomed flower<sup>12)</sup>’ になった Lady Jane である。

## 3 ラケル

*Epitaph* のもう一つの特徴は天国における Lady Jane の居場所である。ウィンチェスターの主教もエリーの主教も天国に送られて、天使の歓迎を受けたものの、特に親しい友人が二人を待ち受けていたわけではない。しかし、Lady Jane のために、詩人はラケル(That fair Syrian Shepherdess)を用意していた。二人とも美人であり、恋愛結婚をし、長い不妊期間(Jane は7年)を経て、第二子の出産時に他界している。

ラケルの登場について、Daiches は、聖書の人物を、この詩の「形式化されたイメージ」に効果的に適応させたミルトンの技巧に注目している<sup>13)</sup>。さらに、Gregory は、ミルトンに対するダンテの影響を指摘している。「ダンテが『天国篇』でベアトリーチェとラケル(二人とも出産のために他界した)を薔薇の第三段の列に置いたように、ミルトンも侯爵夫人とラケルを結びつけた<sup>14)</sup>。」ここに Lady Jane —— ラケル —— ベアトリーチェという図式が出来上がった。ラケルがもたらした絶大な効果により、Lady Jane とダンテの天国がつながって、侯爵夫人の位置は確固たるものになった。

当時の女性が出産が原因で死亡することは、日常よく起る不運な事故であったろう。その事は男性の目にはどのように映ったであろうか。女性の運命と思い、半ばあきらめていたかもしれない。ミルトンがどういうふう感じていたか、この詩から推察してみたい。特に出産が原因となった不幸が歌われている箇所を抜きだしてみよう。

若くして他界した（8-14行）= 7行

出産時の不運（26-30行）= 5行

母子ともに他界（31-46行）= 16行

夫人とラケルの不幸（67-68行）= 1行

合計29行となり、これは全詩（74行）の約40%にあたる。

この数字は、ミルトンが女性独特の不運について、関心以上の感情を抱いていたことを表わしている。さらに、お産の神 (Luchina)、陣痛 (her throes)、お産の苦しみ (thy travail sore) などのリアルな出産用語が印象的である。女性にたいして、純粋な憧れを秘めている若い詩人は、同年齢の美しい女性の死に接して、男性である自分と対比しつつ、女性の宿命について考えざるをえなかったのではなかろうか。「この世に子孫を増やすために、女性は寿命を縮める」という意味を持つ2行（51-52）が、このような推理を生む根拠である。同様に、Bush が “Milton’s *Epitaph* has lines of comparable tenderness and poignancy.<sup>15)</sup>” と言うとき、poignancy（鋭さ、辛らつき）は、人生についての詩人の洞察に言及していると思われる。

#### 4 二つの詩の比較

*Epitaph* の特徴について批評家たちの意見を紹介しようと思う、当然のことながら、しばしば Jonson の *Elegy* が参照され、結果として二人の詩が比較されることになる。

“the poem is part of the young poet’s apparently deliberate practice in a wide variety of poetic forms, this time in the Jonsonian lyric turned to the purpose of elegy.<sup>16)</sup>”

すなわち、この詩は若い詩人の習作のひとつであり、今回は追悼詩をめざして Jonson 風の叙情詩が作られた、という評価である。“its Jonsonian simplicity may be measured by comparison with the Spenserian *Fair Infant* of three years earlier.<sup>17)</sup>” のごとく、Bush は三年前に書かれた Spenser 風の *Fair Infant* と比較して、*Epitaph* の Jonson 風の簡潔さを指摘している。Hanford の意見も同類であるが Bush よりやや激しい。

“in its sweet simplicity of manner the poem contrasts sharply with Milton’s earlier and more Spenserian elegy, *On the Death of a Fair Infant*.<sup>18)</sup>”

*Epitaph* は sweet な簡潔さにおいて *Fair Infant* とは対照をなすと主張している。Daiches が “This has the quiet control and the firm lapidary quality of Ben Jonson’s poetry in this vein.<sup>19)</sup>” と述べているように、*Epitaph* は端正であり、石細工のような Jonson 的な特質を暗示しているらしい。

次に Jonson の *Elegy* に移ろう。“Jonson’s own heavier and more laboured effort…<sup>20)</sup>” という意見がある。Bush は “Jonson’s own elegy on the Marchioness was a somewhat external and declamatory piece.<sup>21)</sup>” と述べて、*Elegy* にはいくぶん社交辞令的で演説的な傾向があると批評している。Hanford は二つの詩を比較して、

“Milton’s poem is actually more restrained and unadorned than the ponderous tribute produced by the current poet laureate, Ben Jonson himself.<sup>22)</sup>”

と言い、重々しい Jonson の詩よりも、ミルトンの詩の方が抑制がきいていて飾り気が少ないと評価している。

以上の批評は、おおかたミルトンの研究者によってなされたものである。ここで Jonson の研究者の意見も聞かねばならない。Hollander は

“Although there may be recognized everywhere in his range of accomplishment the combination of toughness of wit and vigorous delicacy of control that characterize Jonson’s unique poetic elegance, … the dramatic climax of the magnificent ‘Elegie on the Lady Jane Paulet’.<sup>23)</sup>”

のように述べて、Jonsonの強靱な才気と、詩のトーンを強弱いずれにでも操る能力が結合して、彼の poetic elegance が生まれたと高く評価している。

### 結 び

三年前に書かれた *Fair Infant* に比較すれば、*Epitaph* は内容と型の両面において端正になっている。*Fair Infant* ではギリシャ神話、プラトニズム、ダン、キリスト教など様々な材料を使うことによって、詩人は想像の世界を積み重ねていった。しかるに、*Epitaph* では神話からの登場人物は Hymen, Lucina (お産の女神)、Atropos (運命の女神) の三人であるが、Hymen

は別として、Lucina と Atropos にまつわるエピソードは問題にされていない。*Fair Infant* に見られた複雑さも曖昧さもない。最後にキリスト教的要素であるラケルが現れて、詩に時間的・空間的拡がりをあたえている。

*Epitaph* の簡潔な詩型は Jonson の韻律に習ったものである。「モノシラブルの語を多く使い、中間休止（詩の行の間での特に意味の切れによる休止）を強調していることが、Jonson の影響を反映している…。ミルトンは Jonson の追悼詩を手本にして、ゆっくりとした堂々たる感じのカプレットを作った<sup>24)</sup>。」

Jonson の *Elegy* は Lady Jane 個人にというよりも、典型的な貴婦人に対して呼びかけられているようだ。全体に *Elegy* の方が思想が深く、哲学的・教訓的である。また力強く巨大なイメージに満ちている。この点で Hollander がこの詩を magnificent と評するのも肯定できる。Hardison は Jonson のキリスト教的な追悼詩をゴシック様式の聖堂にたとえている<sup>25)</sup>。一方、ミルトンの *Epitaph* にはしみじみとした哀惜の情が感じられる。Lady Jane のこの世での苦勞に報いるために、詩人は、最後に彼女を queen (74) にしたのではないだろうか。

### 文 献

- 1) 武村早苗 (1996) ミルトンにおける死 (3) 第一部. 川崎医療福祉学会誌, 6 (2), 313—321.
- 2) 以後 *Epitaph* と略する。Jonson は Winchester ではなくて、Winton という地名を用いている。Winton は bishop of Winchester という称号をラテン語化して短縮した形である。(元来は Wintoniensis). bishop of Winchester が、Winton に地所を所有していた Talbot 家の先祖であった、というのがその由来である。Room Adrian (1983) *A Concise Dictionary of Modern Place-Names in Great Britain and Ireland*, Oxford University Press, Oxford, p136.
- 3) Gregory E. Richard in Hunter WB (ed) (1978) *A Milton Encyclopedia*, Associated University Presses, Inc., New Jersey, vol. 3, p63.
- 4) テキストとして Bush Douglas (ed) (1965) *The Complete Poetical Works of John Milton*, Houghton Mifflin, Boston を使用した。以後 *Poetical Works* と略する。
- 5) *As You Like It*, Arden Shakespeare (1967) Methuen, London, p126.
- 6) 加藤憲市 (1984) 英米文学植物民俗誌. 富山房, 東京, p347.
- 7) オウィディウス. 中村善也訳 (1981) 変身物語 (下). 岩波書店, 東京, p59.
- 8) 加藤憲市 *op. cit.*, pp150-151.
- 9) Carey J & Fowler A (ed) (1968) *The Poems of John Milton*, Longmans, New York, p128.

- 10) 加藤憲市 *op. cit.*, p100.
- 11) *Ibid.*, p307.
- 12) Brooks C & Hardy EJ (1968) *Poems of Mr. John Milton*, Gordian Press, Inc., New York, p121.
- 13) Daiches David (1968) *More Literary Essays*, Oliver & Boyd, London, p104.
- 14) Gregory E. Richard *op. cit.*, p63.
- 15) *Poetical Works*, p85.
- 16) Hughes MY (gen. ed.) (1970) *A Variorum Commentary on the Poems of John Milton*, Routledge & Kegan Paul, London vol. 2, part 1, p193. 以後 *Variorum Commentary* と略する.
- 17) *Poetical Works*, p85.
- 18) Hanford JH (1970) *A Milton Handbook*, Meredith Corporation, New York, p118.
- 19) Daiches, *op. cit.*, p52.
- 20) *Variorum Commentary*, vol. 2, part 1, p193.
- 21) *Poetical Works*, p85.
- 22) Hanford, *op. cit.*, p118.
- 23) Hollander John (1985) Ben Jonson and the Modality of Verse In: Bloom Harold (ed) (1987) *Modern Critical Views BEN JONSON*, Chelsea House Publishers, New York, p213.
- 24) Gregory E. Richard *op. cit.*, p63.
- 25) Hardison OB (1962) *The Enduring Monument*, The University of North Carolina Press, p142.